

---

# 騎士の戦い

ごんすけ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士の戦い

### 【Nコード】

N8994V

### 【作者名】

ごんすけ

### 【あらすじ】

13人の仮面ライダーのバトルロイヤルの勝者、仮面ライダーナイト。

彼は恋人の入院室で静かに眠る。そして目覚めた朝・・・そこは中学校。

謎の転校生、魔法少女、ミラーワールドとは違う異世界。彼を待ち受けるものとは！？

## 第一話 ここはどこだ（前書き）

2002年に放送された仮面ライダー龍騎と2011年に放送された魔法少女まどか マギカのコラボ小説です。

ネット上で似てる、似てると言われ多くの龍騎とまどかの小説が生まれている中、私も書きたいと思ったのがきっかけで書き始めました。

龍騎のもう一人の主人公秋山蓮がもしまどかたちのクラスメートになつたら、

という考えの下書いています。

舞台は仮面ライダー龍騎最終話VSオーディン後からとなります。まどかの舞台は第一話から始まりますがネタバレにはご注意ください。

また大筋は考えていますが行き当たりバッタリ展開と私見がかなり入ると思います。

そのため気分を害する方もいらっしゃるかもしれません。

二時創作を作るのは初めてですがなるべく世界観を壊さないようにに努めたいと思っています。残酷な描写は極力入れないようにします。

入っている話にはタイトルに

「残酷描写有り」など分かりやすくする予定です。

どうぞ、宜しくお願いします。

## 第一話 ここはどこだ

「これが・・・新しい命!!」

その男の名前は秋山蓮<sup>あきやまれん</sup>仮面ライダーナイトの正体だ。

13人の仮面ライダーの頂点となった蓮。

彼の願い、それは恋人の命を救う事。

「鏡の中にある願い」

200X年X月頃から突如として増えだした失踪事件。

行方不明となる彼らはいったいどこへ消えたのか？

表題の通り鏡の中である。おそらくこのページを

読んでいる御方は笑っておられるだろう。

しかし鏡の中にいる生物達は幾度も人間達を

狙ってきた。その生物達と相反する存在、そう、

それが仮面ライダーである。彼らは鏡の中にいる

生物達を倒しながらある一つの目的を持って行動している。

仮面ライダーと名乗る彼らは全部で13人。彼らは

最後の一人になるまで戦い続ける事を宿命付けられた。

13人の仮面ライダーの頂点に立つものはどんな願いでも

かなえることが出来る。他者を蹴落とし勝者となった者だけが

願いをかなえることが出来るのだ。だが一度仮面ライダーと

なった者は二度と元の普通の人間には戻ることが出来ない。

それだけ重い使命を持ったものがライダーとして戦ってきた。

油断すれば殺され、人々から祝福を受けるわけでもない。

彼らは悩み、苦しみ、それでも誰にも相談できずただただ、

自分が歩んだ道を正しく思い行動に移すのだ。

鏡の中の生物から人間を守る者、自分の欲望のため戦う者、  
たった一人で声を振り絞り戦いを止めさせる為に戦った者。

仮面ライダーの数だけ思いがあり、戦う理由がある。  
ちっぽけな存在だとしても自分の強い思いを持って・・・

以上が、仮面ライダーと名乗る人間達の戦いの真実である。  
この戦いに正義は無い。あるのは純粋な願いだけである。

恵理「蓮・・・そんな所で寝ていると風邪引くよ」

頭に恵理の声が聞こえた。

安心できる。やっと・・・俺は答える。

「ああ、分かっているさ。恵理・・・」

だけど眠い。もうすぐ担当医も来るだろう。

それまで寝かせてくれ・・・。

「・・・くん！・・・やまくん！」

「恵理・・・」

「秋山くん！」

突然の大声に目を覚ます蓮。

「誰だ・・・？あんたは？」

目の前にはメガネをかけた女性がいた。

随分とデカイ女だ。そう思いもう一度夢の世界に入ろうとしたときである。

「秋山君！！起きなさい！ホームルームは始まっているのよ！！」  
何を言っているんだコイツは？ホームルーム？そういえば俺は床に眠っていたはず。なんで椅子に座って眠っている？

よく分からず起き上がってみるとそこは想像を絶する世界だった。  
机、椅子、制服を着ている俺。全員同じ服。ここは・・・教室？  
「どういうことだ？」

初めてミラーワールド来た時よりも驚いている俺がいた。

## 第二話 はじまりの歌

「なっ・・・」

蓮は呆氣に取られた。

- 数分前まで生きるか死ぬかの戦いをしていたんだぞ!?

それが何で

まさかこれが城戸が言っていた仮面ライダーオーデインのタイムベントか?

だが・・・おかしい。百歩譲ってタイムベントの力で俺が学生時代に戻ったとしよう。それなら見覚えのある懐かしい風景があるはずだ。だが周りはちっとも見覚えのある世界ではなかった。

机と椅子は見たことも無い鋭角的なデザイン。教室の壁もガラス張り。

そして中学時代の体格に戻った俺。一体何が・・・

考えるヒマも無く眼鏡の女は蓮に質問をした。

「秋山君!! 目玉焼きとは固焼きですかッ! 半熟ですかッ!」

教室中がシーンとなっていた。

「好みによるだろ・・・」

蓮は小声で答えた。な・・・何を言っているんだ? この女は? 内

心そう思った。

しかし眼鏡の女、失敬、どうやらこのクラスの担任らしい。この担任の先生は

なおも続ける。

「その通り! 目玉焼きの焼き方で怒る男はけしからん!

女子のみなさん! くれぐれも目玉焼きの焼き方で喧嘩する男とは付き合わないように!」

教室がざわついた。どうやら担任の先生は彼氏と喧嘩、もしくは別

れたらしい。

「俺は一体・・・なんでここに？」

座りながら考えていると先生はなおも続ける。

「はい、それから今日は転校生を紹介しまーす！」

また教室がざわついた。転校生が来る日というのは緊張するものである。

「まさか城戸や北岡が来たわけでないだろうな」

内心心配もした蓮だったがその心配も無用のものだった。

ドアをあけて入ってきたのは長い黒髪の少女だった。

彼女が入ってくると今度は教室が静かになった。あまりの容姿端麗さのためだろう。

「暁見ほむらです。よろしくお願いします」

その少女が名前を言うと同時に先生が黒板に名前を書いていた。

「・・・」

蓮も黙って見ていた。この女・・・何か分からないが何かを感じさせる。

まるで百戦錬磨。ライダーとしての能力か、それとも気のせいか・・・。

その転校生は休み時間も人気だった。保健係と保健室へ行ったらしいが、まあ俺には関係ない。

窮屈な教室を抜け蓮は一人で散策をしていた。

「まさか俺の名前がしつかりと出席簿に書かれているとはな。しかも1番とは」

考えながら歩いていると向かいの生徒が話しかけてきた。

「おい、お前2年だな？ここは3年の通路だぜ？」

どうやらかなり歩いていたらしい。

「3年の通路は2年は歩いちゃいけねーんだよ！」

そんなルールあったか？自分が中学時代の事を考える・・・そうだ確かにそんな

ルールがあつたかもしれな・・・

ガシッ！！

蓮は飛んできた拳を片手で受け止めた。突然３年生と思われる男子生徒が蓮めがけて

殴りかかってきたのだ。そして蓮は一言。

「結局は誰かを殴りたいだけか？下らないな」

そう言うたちまち廊下で大乱闘が始まる。殴りながら気づいたこと。どうやら俺の

腕力は中二レベルまで落ちている。それでも一対多の喧嘩は慣れているので応戦は

できる。だがやはり中二のレベル。一年の差は意外と大きく蓮も怪我をしていった。

それでも優勢になるのが蓮の凄いところだ。ライダーになる前から喧嘩ばかりの毎日。

ハイドラグーンと命をかけて戦ったあの日に比べればなんて平和なんだ。

不謹慎ではあるが本気で向かってくる３年生に対し微笑みすら浮かべる蓮であった。

その時 -

「はい、そこまでッ！！」

響いたのは・・・ああ、俺の担任だ。確か和子先生と呼ばれていたな。

「秋山君、大丈夫だった？」

「みんな！時計を見なさい」

時計？・・・次の授業が始まる数分前だった。３年生に向かってなおも続ける。

「この前みたいに喧嘩で教室移動遅れましたなんて言ったら先生は怒るでしょうね」

そして先生は振り返り蓮に向かって言った。

「秋山君、あなたはいいから保健室で治療を受けてきなさい」

蓮は黙って保健室に向かう事にした。

・・・保健室ってどこだ？

考えていると向かいから例の転校生、暁見ほむらがやって来た。

「おい、確か暁見ほむらと言ったな。お前保健室へ行ったんだろう？場所を教えてくれないか？」

しばらく黙り込んだ後・・・

「あつちよ」

と一言。

「すまん」

蓮も一言ですませた。

すると振り返らず暁見ほむらは言った。

「あなた・・・何者？」

蓮は振り返る。

「私は・・・あなたを知らないわ」

蓮の頭の中は？？？だった。

こいつ城戸とは違う馬鹿か・・・。

「俺だってお前の事は知らない。そもそも転校してきたお前がなんで俺と知り合いなんだ？」

もつともなぜここにいいのか教えて欲しいのは蓮本人なのだが。

「ならばいい、私の邪魔をしなれば・・・それでいい」

そういうとほむらは去って行った。まったく今日はわけが分からない奴によく合う。

- なんだかんだで放課後。

西暦を調べて改めて分かった。やはり俺の過去じゃない。

だが俺は俺だ。それは財布の中のバイクの免許証とカードデッキで証明できた。

この時代はどんな音楽が流行っているのだろうか？何気なく立ち寄ったCD店。

思えばこれが俺の失敗だったのかもしれない。

CD売り場になぜだか・・・場違いだろう・・・。白い、白いぬいぐるみ？

手にとつて触れてみる。

「お前は・・・？」

すると白いぬいぐるみは蓮に語りかけた。

「君、僕が見えるのかい？」

### 第三話 戦いの記憶

「何時の間にか俺はモンスターと会話が出来るようになったのか」  
蓮は独り言のようにつぶやく。

「ひどいなあ。僕はモンスターなんかじゃないよ。」

その白い生物は口も動かさず喋っていた。

「それにしてもおかしいね？僕の姿は僕が見せようとしている人間にしか見えないはずなのに。君にもフィルターをかけているはずだよ？・・・おつとやばい僕狙われているんだよね。それじゃ」

白い生物はぴょんぴょんとCD売り場を飛んで行ってしまった。

待てよ？蓮は思う。奴は明らかに浮いた存在。奴をつければ何か手がかりが掴めるかも知れない！

奴が逃げたのは非常口。あのスピードならそう遠くへも行っていないだろう。

だが蓮が見つけたのは意外なものだった。

「お前・・・暁見か！？」

そこにいたのは暁見ほむら、今日学校へ来た転校生の姿だった。

だが制服ではなく黒とグレーの服を纏った勇ましい姿。そしてその可愛い

姿とは裏腹に銃と爆弾を両手に持っている。その視線にはあの白い生物が

足を引きずっている姿だった。

「暁見、その生き物は何をしたんだ？」

「あなたには関係ない」

どうやらこちらには何も教えるつもりは無いらしい。あの白い生物・

死んだ所で構わないが・・・。

蓮はゆっくりとかがみ白い生物の横に座る。

「秋山、どきなさい」

ほむらは静かに忠告を入れる。

「秋山？」

蓮は動揺していた。その白い生物から流れる赤黒い液。紛れもない血液。

蓮の頭の中に一人の人物が出てきた。

城戸真司

子供をモンスターから守り死んでいった我が友。死にかけの奴を抱きかかえた時も

俺のてのひらは血で染まっていたんだ。

奴と出会ったのは冬の寒い日。どんな事にも首を突っ込むアイツを俺は何度も邪魔だと思い、時には殺そうとした事もあった。

だが何時の間にかあいつは俺の心の中に入り込み・・・そして唯一の友とまで

呼べる奴になった。

城戸・・・今までの俺ならこいつを見殺しにしたが・・・俺がこんな考えをするようになったのはお前のせいかな。

「暁見。こいつを少し貸してくれ」

蓮は白い生物の首を掴み話しかけた。

「お前はどこから来た？お前か？俺にこんな仕掛けをしたのは」

蓮は学生証をかざして白い生物に見せる。だが反応は薄く

「いや、僕は君の事なんかこれっぽっちも知らないよ。どこから来たのかなんて

こっちが聞きたいくらいさ」

「そうか」

大した答えも得ることができず・・・そいつを床に下ろそうとしたその時

「あなたたの！？私に助けを呼んだのは！！」

今度は誰だ・・・？あ、あいつも確か俺のクラスの女子だ。

確か・・・

「会いたかったよ！まどか！」

白い生物は蓮の腕から抜けてまどかと呼ばれる少女の元へ走って行く。

蓮も思い出したように話す。

「そうだ、鹿目・・・だったか」

「あれっ、秋山君？なんでここに・・・あっほむらちゃん・・・。」  
あっけにとられたまどかに対しほむらはいつもの口調で話す。

「そいつを渡しなさい。鹿目まどか。」

「駄目だよ。だって、だってこの子怪我してる！」

「あなたには関係ない」

「でもこの子が私を呼んでたの！助けてって！」

「そう・・・」

ほむらはゆっくりと歩きまどかに近づく。彼女の狙いは白い生物のようだ。

「暁見、どういう事が説明しろ。こいつの正体が悪魔なのだとしたら・・・」

俺はお前に手を貸す。だがお前の私情なら・・・

「あなたにはもつと関係ないわ。あなたは部外者よ」

「何だと？どういう事だ？」

困惑するまどかをよそに蓮は相手が女だということも忘れていた。

今までなら真司、結衣、手塚らが止めていたが・・・

「まどか！こつちよ！」

ん？蓮が振り向いた時には既に遅し。目の前が真っ白になっていた。  
「ぐっ、消化器か。あいつ鹿目の近くの席にいた・・・」

「美樹さやかよ。あなたとまどかがいなければもう少しだったのに・・・！！」

ほむらは勢いよくジャンプして煙から抜ける。

そして蓮も・・・だが・・・また気配が変わった。  
周りはこの世のものとは形容しがたい、ぐんにやりとした不気味な世界。

さっきまでの景色とはまるで違う。やっぱりこれは夢なのか？

普段は冷め切っている蓮ですら今の状況が飲み込めなかった。

床は割れ謎の奇妙な生物が・・・いや、生物と言っのだろうか？

考えるヒマも無く異様な奴らは蓮をふつとばしダンスを踊るかのよう

歩き回る。幸か不幸か蓮が飛ばされた場所のちかくにはまどかやさやかが。

「秋山君！！」

仮面ライダーになればこいつらを倒せるかもしれない。

「ここにいろ！」

彼女達に告げてカードデッキを取り出し少しでも自分が写っている場所を探す。

「あんた・・・怖くないわけ！？こんな状況で！！」

さやかが蓮に問う。

「怖かるうがやるしかない」

ポケットに手を入れた・・・その時！！

辺りが急に明るくなつたかと思うとまどか、さやかは光に包まれていた。

「これって・・・」

「危なかったわね」

・・・誰かが俺の後ろにいる。暁見の声じゃない。

「でも、もう大丈夫」

振り返るとそこには黄色い服に身を包んだほむらとはまた違う雰囲気を持った

少女が立っていた。

「あなたも・・・もう大丈夫よ」

そう言うとな彼女は蓮にも光の壁を作り攻撃から守らせるのであった。

## 第四話 魔法の世界

「あら、キュウベえを助けてくれたのね、ありがとう。その子は私の大切な友達なの」

優しい声でまどかに向かつて話しかける彼女にたじろぐまどか。

「あ、私呼ばれたんです。頭の中でこの子に助けてくれって!」

まどかは自分の意見を言うのに精一杯という感じだったが彼女はまどかの腕に抱かれているキュウベえと呼ばれる生物に目をやると納得したように口を開いた。

「ふうん、なるほどね。その制服、あなたたちも見滝原の生徒みたいね。2年生?」

とりあえず彼女が作った光と彼女の正体について聞きたい……。  
が、蓮が聞く前にさやかが質問した。

「あ・あなたは?」

「そうそう、自己紹介をしなくちゃね。でも、その前に」

彼女は言葉を止めた。無数の棘が蓮たちを囲んでいたからだった。

「一仕事、片付けちゃってもいいかしら?」

装飾を施した楕円形の黄色い石を持ち足で円陣を描く。

そして彼女自身が光に包まれる。光が消えると見滝原の制服から

白と黄色の衣服に身を包んだ彼女が現れた。頭には帽子、ロールした髪には黄色の

ピンでまとめられている。

「ハッ!」

勇ましい声と共に空高く舞い上がると無数の銃が彼女の周りを囲む。そして怪しげな生物達を撃ち尽くすと銃は消え去った。

彼女が格好良く着地を決める共に元の世界に戻っていった。

「戻った」

まどかがぼかんと口を開けいた。

なんて奴だ……。

仮面ライダーとして戦ってきた蓮ですら驚いているのだから  
まどかとさやかはもつと驚いていたに違いない。

元の世界に戻った瞬間にほむらがこちらを睨み立っていた。  
そのほむらに対しても彼女は蓮たちと変わらないペースで話す。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐに追いかけなさい。」

今回はあなたに譲ってあげる」

一方のほむらは表情一つ変えていないが声だけは機嫌が悪そうなのは分かった。

「私があるのは・・・！」

ほむらが話そうとした瞬間、また彼女は言う。

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの。」

お互い余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

ほむらは答えないがずっとこちらを睨んでいる。俗に言うガンをつけるというやつだが

その時間も長くは無かった。ほむらは一瞬だけ悲しそうに瞳をつぶり去っていった。

ほむらが去りまどかとさやかもほっと一息を付いていた。蓮もそこから去ることにした。

別にほむらが気になったわけではないがあの得体の知れない生物を一瞬で葬った

彼女がキュウベエの親みたいなのだろう。キュウベエの事や今しがたの

出来事をもう少し調べたいが今はそんな気分ではなかった。

「ありがとう、マミ。助かったよ！」

去ろうとした時後ろからキュウベエの声がした。振り返ると元気にシッポを

ふるキュウベエ。ピンチを救った彼女の名前はマミというらしい。

「お礼ならこの子達に。私は通りかかったただけだから。」

マミはまどかとさやかに向かって言うキュウベエがまどかたちの方を振り向いた。

「ありがとう僕の名前はキュウベえ。助かったよ！」

まどかはおそろおそろ聞いてみた。

「あなたが私を呼んだの？」

「そうだよ！鹿目まどか！美樹さやか！」

2人は驚き、今度はさやかが質問した。

「なんで私達の名前を？」

なるほど、この2人とは初対面か。まあ、見知らぬ奴が自分の名前を知っている事は

よくあるからな・・・蓮はそう思いながら今度こそ去ろうとした。  
だがその時、キュウベえの言葉に耳を疑った。

「僕、君達にお願いがあつて来たんだ」

「お、お願い？」

「僕と契約して魔法少女になつて欲しいんだ！」

契約。蓮が忘れたかった言葉でもあつた。否が応でも思い出すあの悲劇。

「・・・契約・・・だと!？」

蓮が驚くとキュウベえが振り返り、

「そうだよ！ええと・・・ごめん。君の事はあまりよく知らなくて  
でも

僕の姿が見えるのならきつと君にも素質があるはずだよ！」

こいつ神崎士郎では無いだろうな？とはいえ調べる方法は皆無。  
そうか。と一言だけ告げて蓮は非常口から出て行った。

外に出ると夕日がまぶしい時間になっていた。しかし帰るにしても  
どこへ

帰ればいいのやら。ここが見滝原という街だということは分かった  
が・・・

改めてカバンの中を探ると学生証が入っていた。まさかと思いつつ  
住所欄を

見ると、とある住所が書いてある。

「俺の家か？」

とにかく今日は色々なことがありすぎた。家があるのなら早く帰って眠りたい。

俺の世界にいた恵理も助かった。調べるのは後でもいい。

だが住所欄に書かれた建物まで行く途中、やはりというか何というか鏡の中にいるパートナーが気になった。元の世界では蝙蝠モンスターの

パートナーがいた。名前はダークウイング。共に戦っていたが、ダークウイングとは契約と言う形で力を共有していた。

契約内容・・・

ダークウイングの力や技を使い他モンスターと戦える戦力を手に入る。

変わりに蓮はダークウイングに餌をやらなければならない。もし餌を与えない

時期が長くなるとダークウイングは契約破棄とみなして蓮を食い殺す。

契約の証であるカードデッキの破壊も契約破棄とみなされる。

餌は他モンスターの魂か人間。餌を与えれば与えるほどモンスターは強くなり

その分仮面ライダーの能力もアップする。

この世界に来る前にかなりの激戦を行ったため奴も相当腹が減っているだろう。

「俺は浅倉と違ってお前とゲームなどするつもりは無いからな」

俺は自分が違う世界に来てしまっている事に悲しむ事も許されないのか。

見知らぬ者とは言え人間を食わせるわけにはいかない。餌が見つかるまで

登校拒否して鏡が無い生活をするか・・・。

それにしても魔法少女とは随分とメルヘンな響きだ。あのマミとい

う女。

という事は見慣れないあの服を着たほむらも魔法少女か？

「秋山」

振り返るとほむらがいた。

「秋山。私が去った後の事を教えて。キュウベえと話をしたんでしょ？」

「俺はしていない。まあ、他の二人とは親しげに話していた、一方的にだが。」

それがどうした？」

「やはり・・・」

ほむらは怒りの感情を出しているようにも見えた。

「ところで暁見、お前もその魔法少女という奴なのか？」

「ええ。でも鹿目まどかと美樹さやかには言わないでにおいて条件を付けられたがあつさりと答えを聞けてしまった。」

「で、キュウベえはなんて言っていたの」

蓮も隠す理由は無いと判断し、話すことにした。

「あの2人に対して助けてもらった礼をした後で2人の名前を言い当てた。」

その後で契約して魔法少女になってくれと言っていた。それだけだ。俺はそこで

出てきたから、もしかしたもう契約しているかもな。」

それを聞くとまたほむらは悔しそうに目を閉じ、すぐに開く。そして蓮に話しかける。

「分かった。ありがとう。」

「おい、お前らの目的は・・・」

聞こうとした瞬間ほむらは高く飛んで消え去った。どうも魔法少女というのは話を聞かない奴が多い。

慣れない街を歩きやっ住所欄に書かれた所までついた。マンションタイプだ。

俺のいた世界で元々住んでいた家に似てるな、と思いつつ部屋番号まで来て

ドアノブを空けた時だった。

「あら？」

隣から声が。

「あなた・・・さっきの・・・」

マミだった。

そして、嫌な予感の音が聞こえたような気がした。

## 第五話 魔女対怪物

「・・・どうも」

関わらないでおこう。どうせロクでもない奴に決まってる。  
すぐさまドアをしめようとする蓮。

「あら、随分と用心深いご近所さんだね。私もここに住んでいるの。」

さっきあなたを襲った生物の事を教えに来ただけだ

ドアを閉めかける瞬間、蓮の動きが止まった。まさか向こうから来るとは。

「奴らはモンスターか？」

蓮の口からとつさに出た問いにマミはくすりと微笑む。

「何を笑っている？」

「ごめんなさい、あなたの言っている事が本気が冗談か分からなくて」

中学生とは言えモンスターという単語を真剣に言う奴なんていない。蓮も分かっている。分かっているが・・・。

あの生物は人間でも動物でもない。モンスターだ。

いや、少なくとも自分の知るモンスターかどうかあやしい。

「そうね。モンスターみたいなものね。あれは魔女と使い魔。人々の憎しみから

生まれる存在よ。そして私はその魔女と戦う魔法少女。あなたはけっこう

危なかった所なのよ。たいていあの世界に入ると人間は出られないから」

「魔法少女は知っている。だがなんでわざわざ俺に教えに来たんだ？」

「そうね。一つ目は鹿目さんと美樹さんにも話したから。あなたに教えないのは

不公平だと思ったからかな。それとキュウベえが見えたから。

キュウベえが見えるということはあなたも他人事じゃないからよ」

「どういう意味だ？」

「あなたは前代未聞の魔法少年になれるかもしれないからよ。

契約すればどんな願いでもひとつだけ叶える事が出来る。その代わり

その後は死と隣り合わせの状態で命がけで魔女を倒さなければならぬ」

どつかで聞いたフレーズだぞ。それは俺もやってきた事だ、と言いたい

気持ちを運は必死に抑えた。

「お断りだ。ところで、その魔女や使い魔という奴らにはどうやって会える？」

「うーん、口で場所を言うのは難しいのだけれど……。負の感情が多い場所って

言うのかしら。人気の無い場所や自殺が多い場所とか。行方不明事件には魔女が

絡んでいる事も多いわ」

ますます関連性が高まってきたな。そう思いもう一声かけてみることにした蓮。

もしかしたらダークウイングの餌が転がっているかもしれない。

「どうやったらその世界へ入れる？」

その時だった。マミの後ろから現れたのは……。キュウベえ。

「それ以上の話は魔法少年になってくれないと話せないよ。一般人にはあまりにも

危険すぎる。そうだマミ、彼も魔女退治ツアーに連れて行ってあげなよ」

「そうねえ。あの後私の家で鹿目さんと美樹さんに魔法少女の話をしたの。

そしたら2人とも迷っているみたいだったから私の魔女退治を実

際に見て、

魔法少女になるか ならないか判断してもらおうと思っているのよ。

「あなたも私と一緒になら魔女の住む結界に案内できるわ」

それを聞いた蓮は冷めた表情で言い放った。

「お前・・・魔女に勝てる絶対的な自信があるようだな。そうでなければ安易に素人を

連れて行けるはずが無い。さっきの戦いも素晴らしかった。俺はそう思う。だがな

お前を見ていた鹿目と美樹は間違いなく尊敬やかっこよさに憧れているように見えた」

「・・・何が言いたいのかしら？」

「さっき死と隣り合わせだと言ったがそういう厳しい側面も見せるつもりなのか？」

「勿論そのつもりよ。安易な気持ちで魔法少女にはなってほしくないもの」

それを聞いて少しは安堵したのか、蓮の声も少し和らいだ。

「そういう事なら分かった。ま、俺は魔女退治ツアーは不参加だ。」

「そう・・・残念だわ。もしかしたら凄い戦士になれるかもしれないのに」

「すまないな。また魔女情報について疑問が出たら教えてくれ」

蓮はドアを閉めた。キユウベえがマミを見上げる。

「残念だったね」

「そうね」

キユウベえはマミの肩に飛び乗る。

「名前は判らないが僕が見えるということは只者じゃない。

もしかしたら人間に化ける能力を持った魔女かもしれない。」

「あら、魔女は結界の奥深くにいるという情報しか聞いてないわ。キユウベえ」

「例えばの話さ。何にしても目はつけておいて損はないよ。まあ自

分から僕に

声をかける位だから魔女とは違う存在だろうと思う」

「ふうん、それはそれで気になるわね。でも閉められちゃったから仕方ないわ。戻りましょ」

「マミは振り返り自分の部屋へ戻っていった。

「絶対に勝てる自信……。あれば欲しい物ね」

俺が気になるのはなぜここに来てしまったか、それだけだ。そう、それだけ。

ダークウイングの腹具合は……。そうか、まだ我慢は出来るか。こちらへ来てから

ドラグレッダーの声は聞かないな。俺を契約相手と見ていないからか。

蓮が取り出したのは龍騎のカードデッキだった。

仮面ライダーオーデインとの一騎打ちをやり終えた後、現実の世界に戻ると

混沌とした世界で救急隊や消防隊がかけつけていた。

城戸の遺体があった場所には誰もおらず、道路に落ちていたのは血が付いた

龍騎のカードデッキ。

そしてしばらく経った頃

放課後の帰り道、蓮の前にはむらがやってきた。

「で、秋山。あなたが入り込んだ世界について興味はあるわけね？」

「まあな。」

「私なら入る術を知っているわ。あなた、私に手を貸してもいいって言っていたわよね？」

「……言ったか？言ったな。」

「ああ、言った」

「忘れていたわね」

「覚えていたさ」

「まあ、いいわ。あなたを助けた巴マミという魔法少女。彼女を止めにいくわよ。」

「何のために？」

「鹿目まどかと美樹さやかを魔法少女にさせないためよ。彼女はあの2人を」

魔法少女にさせようとしている」

「なるほど。確かに魔法少女なんて命を賭けた戦いは憧れでなる物じゃないしな」

ほむらと供にやってきたのは廃ビル。ほむらが指差す方にマミ、まどか、さやかが

見えた。発見したと思ったらすぐさまマミは魔法少女に変身。

「あれは・・・」

蓮が見たのはビルの屋上。女性が自殺をしようとしているところだった。

そして女性が飛び降りようとしたその時、マミのリボンが女性を包み地面へ

そつと下ろしていた。すぐさまマミたちは異世界へと入っていく。

「なるほど、あの自殺は魔女の仕業というわけだ」

「そうよ。おそらくあの魔女との戦いの現場をまどか達に見せるはず。行くわよ」

ほむらは拳打をして壁に穴を開ける。その中から現れたのはついこの前見たばかりの

異世界だった。2人もマミたちを追って異世界へ。

「どうする？少なくともマミは魔女は倒すんだらう？」

「魔女は私が倒す。そして必要とあらばマミも殺す」

「殺す事はないだろ？」

「逆にまどかたちは魔法少女にはなりたいたくなくなるわ。」

確かにそうかもしれないが。蓮は疑問だった。なぜほむらという女

はこんなにも

まどか達に魔法少女にさせないように仕向けるのか。  
しばらく走るとマミたちに遭遇した。

戦っているマミを見続け、魔女を粉砕。

「すっごーい、マミさん！」

「もう、遊びじゃないのよ。これは戦いなんだから」

本当に戦いか？さやかとマミの会話を聞いて蓮は思った。確かにマミからは覚悟の

ような物に見えるのだ。だが問題はパフォーマンスだ。魔女に捕まっても余裕綽々。

戦っている姿は優雅そのもの。年頃の女の子だったら逆にかっこいいと思われる

だけなのでは？

「私達、遅かったようね」

ほむらはまたしても悔しそうな声で話した。

「だが魔女は倒せた。あの自殺をしようとした女も守れた。やはりお前と巴で

話し合うしかないだろ」

「それが出来れば苦労はしないのよ」

蓮とほむらが言い合っていたときだった。棘の塊のような玉がこちらに

飛んできたのだ。それをほむらがキャッチした途端にマミの声が聞こえた。

「あなたに譲ってあげるわ。あと一回くらいは使えるはずよ」

だがほむらの表情は相変わらず厳しく・・・

「あなたの獲物よ。あなただけの物にすればいい」

そう言つてマミに投げ返した。

「そう、それがあなたの答えなのね。残念だわ」

がっかりするマミを見ながら蓮は問う。

「作戦失敗だな。あの棘の玉は？」

「グリーンフシード。魔女が持っていることがある種よ。あれを使うことでソウルジェムを保つ事ができる。」

・・・ソウルジェム。また聞かない単語だ。

「ああつ秋山蓮!」

この声は・・・

「何だ美樹。いきなり大声で」

「なんだじゃないわよっ! 何時の間にかその転校生の仲間になってあかし達を

はめようとしてるんでしょ!」

「さ、さやかちゃん、まだ決まったわけじゃないでしょ」

怒鳴るさやか、戸惑うまどか、呆れる蓮。

「暁美、お前相当嫌われているぞ。」

「あなたの人望もあるでしょ」

「な・・・まあ、否定はしないがな」

「今日は引き上げるわ。巴マミ」

そう言うつと蓮を置いてほむらは勝手に消え去った。

1人残された蓮にマミが語りかける。

「ねえ、あなた本当は何が目的でここまで来たのかしら?」

「魔女を倒す以外の目的だ」

蓮もその場を去っていった。

マミにほむら、同じ魔法少女だが考えている事はまるで違う。

マミは魔法少女になるか考えさせている。ほむらは魔法少女になる事を

頭から否定している。どちらも理由を聞いていないから分からないがほむらの気持ちとしては危険な道に歩んで欲しくないという気持ちからだろう。

仮面ライダーとして生死を賭けた戦いをしていた蓮にはそう感じた。そしてマミ。彼女がまどか達を魔法少女の戦いを見せるのは何のためなのか。

「キユイイン!!」

道路沿いの割れた鏡にはダークウイングが映っていた。

「俺はお前と戦えて良かったと思ったことは一度も無い。仕方なく契約

したんだ。・・・まさか」

- 次の日

さやかのかの痛い視線を浴びながら登校した蓮は一直線にほむらの元へ行った。

「おい曉美、バマミには仲間や家族はいるのか？」

「いきなりだね。それを聞いてどうするつもり？秋山」

「いや、奴は俺と同じマンションに住んでいるんだが少なくともバマミ以外の奴が出てくるところを見ていない」

「そうね、バマミには両親はいないわ。いるのは遠い親戚だけ。

あそこで1人暮らしをしている」

「やはりか。」

ここで一つ気になった。なぜにほむらはこんなに情報を知っているのか。

「なんでそんな事しているの？という顔ね。彼女は最近行動が目立つ人なの。

だから調べていて分かっただけ」

- 昼休みの屋上

「鹿目さん、美樹さん。そんな事があったのね。それで私にテレパシーで」

「そーなんすよ。あの秋山って奴、例の転校生ともつるんですし」

「あなた達のおかげで質問を受けずに済んだわ。ありがとう。でも真面目に

お話したいと思うのよね」

マミさん。秋山君って時々何考えているか分からないけれどそれでも

悪い人には見えないんです。

まどかはそう言いたかったがキュウベえとさやかの言葉を止める事しかできなかった。

マミはさやかの言葉を聞きながら受け流すようにしている事に気が付いた。

その日、魔女見学をする予定の無い日の出来事だった。

まどかとさやかは一緒に下校。

そして蓮は・・・

「さて・・・今日はまっすぐ帰るか」

下校途中だった。まったりと過ごそうとしていたのだが・・・

「あれは、グリーンフィールド？」

そして受け答えをするようにほむらの声が後ろから響いた。

「そうよ。そしてここは病院。魔女が暴れだしたら大変な事になる」

「沢山の患者が犠牲になるという事か。暁美、巴がどうか言う前に

魔女を倒して患者を助けるのが先決じゃないのか」

「珍しいわね。あなたから誘うなんて」

2人は再び異世界の中へ入っていった。今回の異世界は菓子と薬品ばかりの世界。

とにかく今はほむらの後をつけよう。そして魔女との戦い方を頭に叩き込む。

ダークウイングの餌になるだろうか？まあ患者も助けられるし一石二鳥だ。

そして・・・やはりマミとまどかに遭遇した。

「今回の獲物は私が狩る。あなたたちは手を引いて」

蓮はほむらが交渉をしている所を初めて見た。最初からそうしろと思ったのはここだけの話。

「言った筈よね？二度と会いたくないって」

マミは冷たく言い放つ。

「お前、俺の知らないところでもやりあったのか？

問題起こしすぎだろ・・・」

さすがに蓮もほむらに言葉を発してしまった。  
そしてマミとほむらの口論は続く。

「美樹さんとキュウベえを迎えに行かないと」

「その2人の安全は保障するわ」

「信用すると思って？」

そういうとマミの魔法の一つリボンによる拘束術が発動された。  
蓮とほむらは縛られ空中に浮いてしまう。

「馬鹿、こんなことしてる場合じゃ・・・」

「おい、巴放せ」

暴れる蓮とほむらだがギッチリ縛られそう簡単には抜けることが出来ない。

「もちろん怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保障しかなるわ」

「今度の魔女は、これまでの奴らとはワケが違う」

が、マミはそれを聞こうともせず

「大人しくしていれば帰りにちゃんと解放してあげる。

いきましよう、鹿目さん」

マミとまどかは魔女に向かって一直線に走っていった。

残されたほむらと蓮。

「くっ、こんな事をしている場合じゃ・・・やはり巴マミには無駄だったわね」

そう言うとき体中の力を抜いて諦めた表情をとった。

「おいどうした。さっきまで暴れていたのに」

今もリボンと格闘する蓮はほむらに問いかけた。

そしてほむらから出た一言に驚愕する。

「・・・巴マミは・・・死ぬわ」

「何だって？」

「言ったでしょ。今度の魔女は今までとは違う。もう駄目よ」

「駄目ってどういう事だ」

「諦めるという事よ。彼女が死ねばリボンも解除される」

「本気で言ってるのか？死ぬと分かっているのに諦めるのか？」

「あなたには関係ない」

「その言葉は聞き飽きた」

蓮とほむらが口論をしているとも知らずマミ、まどかは先に魔女を見張っていた

さやか、キュウベえと合流した。

「あつマミさん」

「お待たせ」

「さやかちゃん、大丈夫？間に合ってよかった・・・」

マミは魔女めがけて飛び立っていく。

「せっかくのところ悪いけど、一気に決めさせてもらうわよ！！」  
銃を取り出し魔女に向かって一斉乱射を決め込むマミ。

壮大さはいつもと変わらず。そして動きはいつも以上にキレがある。魔女の懷までもう少し。この戦いは負けられないわ。私にやっと仲間が

出来たんですもの！！ソウルジエムには余裕がある勝つためにマミは後先考えず銃を連発する。

そして蓮とほむら。こちらは言い合った後で黙り込んでしまった。お互い罵りあった結果だった。だが蓮はどうしても諦められなかった。

自分がいた世界は我先にと1人の勝者を決めるために殺しあった。だが人々のためにモンスター狩りをした事もあった。

「俺は今まで人のために戦った事もあったな」

ぽつりと蓮はつぶやく。

「今回は魔法少女のために戦う。結果はどうあれ・・・な」

「何を言っているのよ秋山。この状態じゃ魔女にたどり着くのも」

「ああ、難しいな。生身ではな」

「は？何を言っているの？」

「俺は感謝するよ。この菓子だらけの世界で目の前にプリンのカラムエルが」

あることをな」

そう言った瞬間蓮を映すカラムエルの中から巨大なコウモリが出現した。

「なっ、こいつ何者！？」

驚くほむらをよそに蓮を拘束していたリボンを噛み切り蓮を自由にさせた。

「俺は行く。その魔女がどれほどの奴か見てみたい」

そう言くと蓮は走ってマミたちのいる所へ走っていった。

コウモリはほむらのリボンもちぎって蓮について行った。

「まっ、待ちなさい。秋山」

ほむらの声はむなしく響くばかり。

その頃戦場ではマミが巨大な銃を取り出したところだった。

思わぬ苦戦を強いられた。ほむらがわけが違うとは言っていたが当たっていた。

だがそんなことは言っていられない。マミは孤独に銃を向けて魔女と使い魔に

攻撃を放っていく。少しずつ自分にも傷はついていくがそれでもまだ何とかなる。

そして――

「ティロ・ファイナーレッツ！！」

マミの銃口から巨大な弾丸が魔女に向かって命中した。

「やったあ」

まどかとさやかが歓喜の声を出した。

その瞬間だった。

魔女の口からもう一匹の魔女が現れた。さっきまでの可愛らしい姿とは似ても

似つかない顔と体。表情は可笑しさと不気味さを兼ね備えていた。その口には巨大な牙。魔女は一直線にマミに向かってきた。

「くっ！」

マミは間一髪でよけるも足を噛まれ動きが大幅に制限された。

それでも両手があれば銃を構えられる。しかし弾丸は当たっても魔女にはまるで

効果がないようだ。どんなに撃つても血を流しても襲ってくる。

そして左腕、もう一方の足、ついに使用できるのは右腕のみとなった。

「どうして・・・どうして効かないのよ！」

私は負ける訳にはいかない！死ぬわけにもいかない！

せつかく、せつかく何も怖くないと思ったのに・・・駄目、死ぬのは怖い！！

「マミさん！」

まどかとさやかは今にも飛び出しそうだったがキュウベえに止められた。

「駄目だ2人とも生身の人間が行ったら危険だ。それこそマミに迷惑がかかる」

分かっているにしてもマミの元に向かいたかった。まどかとさやかを包んでいた

マミの作った結界が消えかかっている。それはつまり――

「全魔力を集中してあなたを消すわ！」

マミがティロファイナーレを召還しようとしたため

さすがのキュウベえも忠告を出した。

「駄目だマミ！それ以上魔法を使ったら君の体が危ない！」

「死ぬよりマシよ！」

ガッン！！

銃を召還しようとしたマミの体が止まった。現れたのは巨大なコウ

モリの

体当たりが魔女に直撃をしたからだ。

「な、何よ。あいつ」

さやかがつぶやく。まどかは驚き口にも出せなかった。

そして後ろからは甲冑を纏ったような黒い騎士がバイクに乗って現れた。

バイクごと魔女に体当たりを蹴散らし魔女が倒れこんだ。

「キュイーン！」

<ソードベント>

辺りにこだまする声。バイクから降りた騎士の手にはランス上の黒い剣が。

「だ、誰？」

「下がっている。巴」

騎士と魔女の戦いが開始された――

## 第五話 魔女対怪物（後書き）

まどか マギカ第二話〜三話を舞台にしていますが

全キャラに焦点を合わせるのは難しく傍観者となっている

まどかとさやかが置いてけぼりになってしまいました。

また暁美と暁見をずっと間違えていました。申し訳ないです。

マミもネットやCDが無ければここまで死とか孤独にこだわるキャラにはならなかったと思います。

## 第六話 まさかお前・・・？

黒い騎士、当然の事ながら彼の正体は秋山蓮。

名前は仮面ライダーナイト。

が、ここにいる少女達は名前も正体も分かるはずもなく。

「あなた、なんで私の名前を？」

マミは魔法で体を治しなんとか立つ事ができた。

蓮は魔女・シャルロッテに立ち向かいウィングランサーと呼ばれる剣で

口の牙を折り蹴りを入れる。しかしほむらの言う通り

この魔女は強い。まず回復力だ。さっき折った牙はすぐに再生し、剣で傷をつけた部分も再生していく。

「頑丈な奴だ。これならどうだ！」

ウィングランサーを槍の様に投げシャルロッテの体を貫通した。

投げ飛ばされたウィングランサーはダークウィングの尻尾に戻り蓮は腰に装備しているもう一つの剣、ダークバイザーで切りかかった。

自分の体の一部に穴が開いていることに気が付いたシャルロッテはそれに驚き姿を消した。そして元の世界に戻っていく。

「魔女が逃げたのね」

「マミさん！大丈夫ですか！？」

マミにかけよるまどか、さやか、キュウベえ。

「ええ、大丈夫よ。かつこ悪いところを見せちゃったわね。

魔女にまで逃げられたしまったし。」

「なーに言ってるんですか！マミさん！病院から魔女が逃げ出したんだし一件落着ですよ！」

「そうね。あの、仮面の騎士さん。あなたのおかげで死なずにすんだわ。ありがとう」

マミが蓮に向かって礼を言う。

「いや、かまわん」

その声に聞き覚えがあった一同だがライダーの仮面を被っていたため蓮だという事は気づかなかったようだ。

そしてマミのもとにほむらもやって来て説明した。

「調べてみたけど病院の周りには魔女はいない。」

病院の患者が狙われる確立は少なくなった。良かったわね」

「そう、あなたから教えられるなんてね。でもありがとう。」

病院周りを調べてくれた事については感謝するわ」

「それじゃ・・・」

ほむらはまた去ってしまった。

まどかはほむらに消えてしまった事に驚きながら

辺りをキョロキョロ見回すとどさくさにまぎれ変身を

解除した蓮が帰ろうとしている所を発見した。

「あつ、秋山君！ けつ、怪我は無いの？」

まどかの声に穏やかに答える蓮。

「ああ、問題ない。巴、世話をかけた。申し訳ない」

「いいえ、いいのよ。私のほうこそ巻き込んでごめんなさい」

ほむらちゃんと一緒にマミさんの魔法で縛られて・・・という事を

マミのいる前でさやかに言っているのか分からず

黙り込んでいるまどかであった。

### 今回分かった事

仮面ライダーの攻撃は魔女や使い魔にも通用する。

さっきの魔女はお菓子と薬品の世界の中に潜んでいた。

作り出された世界や使い魔はミラーモンスターも食べられる。

ダークウィングはさっきの魔女に行き着くまでの間に

菓子を食べることで少しは空腹が満たされたようだ。

あとは自由にあの世界を行き来できるようになれば・・・

魔女退治は魔法少女に任せるとして俺があの世界や

魔法少女と接触するのはあくまで自分の世界に帰るためだ。

この世界で非日常的な事と言えばそれくらいだ。  
そこにヒントがあるかもしれない。

翌日、やはり曉美ほむらには突っ込まれた。

教室でほむらから声をかけてくることはまず無いので  
なるべく顔を合わせずにいたが放課後のショッピングモール内で  
ほむらと鉢合わせしてしまった。

「昨日のコウモリと一緒にいた仮面の男、秋山ね」

「ああ。あのコウモリは俺の相棒だ」

「なぜ魔法少女の戦いに首を突っ込んだの？」

「昔関わった男が言っていた。運命は変えるものだ、と。お前が  
以前あの魔女と戦ったのか、巴マミの戦力がどれ位か分かってい  
たのか、

俺にはわからないが巴マミが死ぬ運命だったとしたら救えただろ  
う」

「でも魔女は逃げたわ。次は殺されるかもしれない」

「それでも彼女の寿命を伸ばすことは成功した。」

見つけ次第、あいつは俺が倒す」

肝心な見つけ方が分からないが言い切ってしまった以上ほむらには  
聞けなくなった。間抜けな事をしてしまった。巴マミに聞いてみる  
か・・・？

家に帰り、ドアを開けようとした時、見知らぬおばさんから声をか  
けられた。

「ちよいとあんた。見滝原の生徒？なんでうちのマンションには  
多くの生徒が1人で暮らしているんだろっねえ、寮じゃないって  
のよ」

「はあ」

「家賃さえ払ってくれば問題なけどね、

あんた今月の家賃まだ払ってないでしょ？」

「いや、払っていないというか・・・」

財布に銀行のカードは入っている。しかしここに来てから使っていない。

使えるかどうか分からない。郵便貯金なら使えるかもしれんな。

「ちよつと、下ろしてくるから待っててくれ」

そう行つて郵便局へ向かうとした時、おばさんに腕を掴まれた。

「あんた大人への口の聞き方が出来てないんじゃないの？ちよつと来なさい！」

「おい、どこへ連れて行く！？」

連れて行かれたのは喫茶店。そしておばさんは言う。

「ここはね、私が経営している喫茶店さ。そして私の旦那が大家なのよ」

そして蓮を睨みつけ

「家賃は払わなくて良いわ。その代わりここで働いてもらうわよ」

「何を馬鹿な」

「バイト代は小遣いとしてあげるから、お客さんの注文を聞きにいきな！」

蓮はペンと注文表を持って客の元へ

「いらつしやいませ。ご注文はお決まりでしょうか？」

「えつとシフォンケーキとオールグレイティーをアイスで」

「かしこまりました」

一連の動作をみたおばさんの感想

「ふうん、接客態度はまあまあね。笑顔も出来てるわ」

そして蓮からも一言

「まあ、以前は喫茶店で働いていたからな」

注文表をもって厨房へ

「シフォンケーキをひとつ」

ケーキを準備している間紅茶の準備を・・・と思っていたら厨房から聞きなれた声が聞こえた。

「あつ、すいません！まだ焼けてなくて！あつちー！！」

それを聞いたおばさんはまたか！という顔をして厨房に入っていく。

「ちょっとあんた、厨房にいるときは大声出さない！小声でも聞こえるんだから」

蓮も一緒に厨房に入った。この時蓮は驚いた。  
ライダーになった時より？

違う世界に來た時より？

魔女を見た時より？

分からないがとにかく今まで驚いてきた事を忘れる位の事だった。

「・・・！！」

「すみません、おばさん。あつ、俺、城戸真司っていうんだ。よろしく！」

見滝原の制服・・・。てことはあんたも俺と同じ見滝原の中学生

！」

「ふざけるな！」

「なつ、何だよいきなり！」

「何がいきなりだ！なんでお前もここにいるんだ！？」

「いや、そりゃマンションの家賃が払えなくて、そしたらおばさんにここを紹介されたんだよ。あつ、もしかしてあんたも家賃払えなくてここへ來たんだろ？名前何ていうんだ？」

「秋山蓮だ！お前・・・覚えていないのか！？こいつに見覚えは！？」

龍騎のカードデッキを真司に見せるが反応は薄かった。

「・・・悪い。見た覚えは・・・無い。だけど・・・だけどさ、とりあえず、よろしく！」

真司は握手をするため手を差し出した。

そのまっすぐに純粋な表情。何も疑う事を知らなさそうな笑顔。間違いなく校則違反になるであろう首まで伸びたパーマの茶髪。蓮は握手のために差し出された手を思い切りひっぱたいた。

「てえ！な、何すんだよ」

「今は握手する気になれん」

「なんだよ。じゃあいいよ、お前と握手出来る様になるまで頑張る」

「何？」

「同じ職場なわけだし、俺、お前と仲良くなつて見せる」  
そしてこんな長い会話をおばさんが許すはずが無かった。

「あんた達！いい加減にきなさい！働け！」

「はっはい！」

真司は返事をして調理の仕事に戻った。

蓮も注文、皿洗い、テーブル掃除を行った。その間蓮は何をしていたか

覚えていない。かつて自分がいた世界でも紅茶のみ取り扱う似たような店で

働いていたから無意識に働けたのだろうか。分からない。

シャッターを閉めて真司と供にマンションに向かった。

「いやー、でもさ蓮のおかげで助かったよ。1人の時は大変で大変で」

こいつは既に下の名前で俺を呼んでいた。

「俺はお前と一緒に帰ると言った覚えはないぞ。1人で帰れ」

城戸真司は確かに死んだはずで・・・もしかして俺より先にこの世界に？

ここは実は死後の世界？だがそれなら何故記憶が無いなんて言うんだ？

城戸真司は嘘を付けるほど器用な奴じゃない。やっぱりこいつは別人か・・・。

その時、蓮を違和感が襲った。

「この感覚・・・まさか」

「どうしたんだよ蓮。お、おい蓮、あそこ！おばさんが倒れてる！」  
閉めた喫茶店の横でおばさんが倒れていた。

「城戸、あの人を頼む」

「あの人って仮にも店長だろ。っておい蓮待ってくれよ！う、うわあああ」

おばさんを結界から逃すことは出来た変わりに蓮と真司は異世界へ

入ってしまった。

「いつてー、なんだよここ？お菓子と薬品でいっぱいだ」

「奴だな。ここまで逃げていたか」

「奴って誰だよ？」

ドアが勝手に開き使い魔たちがやってきた。

「話している暇はない。城戸、このカードデッキを自分の写る物にかざせ」

蓮はデッキからアドベントカードを抜いて真司に差し出した。

「お前に出来るか？」

蓮は自分の写る透明度の高いお菓子の前でカードデッキをかざす。

鏡に映る蓮にベルトが装着されるとベルトだけお菓子の中から出てきて蓮にも

装着された。

「変身！！」

掛け声と共にカードデッキをベルトに装着。

蓮は仮面ライダーナイトに姿を変えた。

「ええっ？よ、よーし！へ、変身！」

蓮の真似をしてカードデッキをベルトに装着。

真司の姿も仮面ライダー龍騎ブランク体へ

「なんか俺の姿、あんたに比べて地味だな」

「そこは我慢しろ。攻撃力は無いが普通の人間より

防御力は上がったはずだ。とにかく生き延びる事を考える」

龍騎のカードデッキからアドベントカードを抜いたのは

契約の事も考えての事だった。蓮の知る城戸真司では

無かった場合、ドラグレッダーが契約主と誤認したら面倒な事になる。

ドラグレッダーのカードを自分のデッキにベントイン。

腰に装備しているダークバイザーで使い魔たちを切り刻んでいく。

「ちよ、ちよっと待てよ。多勢に無勢じゃないか。1人じゃ無茶だ。俺も手伝う！なんだよ、俺のパンチじゃびくともしないぞ！？」

「言つたろ、生き残る事を考える！邪魔をしなければそれでいい！」

「邪魔をしなければって・・・どうやったら出られるんだよ！」

「魔女を倒せば出られるらしい。魔女の姿は分かっている」

「ま、魔女って」

2人が使い魔相手に戦いながらドアを開けると魔女・シャルロッテが地面から現れた。

「こ、今度は誰だ！？」

「来たな・・・」

上を見上げると可愛らしい面影の無い第二形態のシャルロッテがこちらを睨みつけ突進してきた。

「走れ！」

蓮は真司の背中を押して走らせた。

「どうすんだよ、蓮！」

「広い部屋まで奴を誘き出す。俺のカードで勝負だ」

2人は走りドアを開けては閉め、開けては閉めを繰り返す。

シャルロッテの後ろからの噛み付きと体当たりの猛攻は止まらない。

「うわわわわ、嘘だろおお！」

「広い部屋が見つからないな、仕方ない。ここで勝負だ」

蓮は止まりベルトに付いているカードデッキからカードを一枚引く。

<ソードベント>

ウイングランサーを装備した蓮はもう一枚カードを引く。

<トリックベント>

蓮の体が2人、3人とどんどん増え、8人にまで達したところで

シャルロッテへ立ち向かっていった。

「え、お前八つ子だったのか！？」

真司が叫ぶ。どこの世界でもこいつは馬鹿だな、

蓮はボケなのか本気なのか分からない真司の言葉を無視して

シャルロッテの全身を攻撃する。

喫茶店の前に現れたのはケーキが目的か？それにしても前より凶暴性を増している。蓮を食べるつもりなのか口を開けては

一体ずつ蓮を飲み込もうとしている。狙いをはずしてもそこかしこのお菓子を食いながら床や壁を突き破ってやってくる。

「何でも食べるやつだな」

トリックベントで素早く相手の攻撃を避けつつ剣で攻撃。

「よし、そろそろだな」

新しいカードを引こうとした時だった。

まるで気まぐれでも起こしたようにシャルロッテの動きが変わった。油断したのか蓮の分身も一気に3人が消えてしまう。

「しまった！」

「あつ、大丈夫かよ！」

近寄ろうとする真司だったが彼よりも早く蓮に駆けつける者がいた。

「あなたのファンタズマ、もっと機敏さが欲しいわね」

「巴！？」

「借りを返しに来たわ。何かするんでしょ？」

「ああ、分身を囷にして中央から突っ込むつもりだ」

「じゃあ、私は魔女の気を逸らすと同時に大穴を開けるわ」

「いいだろう」

マミは飛び上がり武器を召還、蓮の分身は近距離から攻撃を開始する。

「ティロ・フィナーレ！」

マミの掛け声とともに蓮はカードを引く。

<ファイナルベント>

現れたダークウイングと一体化し竜巻状になった蓮は

ティロ・フィナーレが命中した場所に体当たりを仕掛ける。

「はー！！」

ティロ・フィナーレと共にシャルロッテの体を突きぬけ辺りは大爆発を起こした。

「あら・・・私なーんでこんな所にいるのかしら」

「きつとご気分が悪かったんですよ。病院に行かれます？」

辺りはさっきまで戦場だったとは思えないほど静かだった。

目を覚ましたおばさんとマミが会話をしている声だけが聞こえていた。

「いやー、一時はどうなるかと思った。なあ蓮。蓮？」

「早く変身を解除してデツキを俺によこせ」

「なんだよ、忙しいやつだな。分かったよ。あれ何だ？」

真司は変身を解きながら蓮に聞いた。

「グリーンフシードというらしい。魔法少女の好物だ」

「魔法少女って、ああ！あの子か！あれは3年生の制服だな」

「おい、待て」

真司はおばさんとマミの元に駆け寄った。

「いやー、助かりましたよ。ありがとうございます！俺城戸真司です！」

「バマミよ。私の方こそ遅れてしまつて、あの方とはお知り合い？」

「あ、はい。俺も今日知り合つたんですけど秋山蓮って言ってます」

「なんでお前が俺の紹介をする！？」

真司の胸を平手打ちして強引に帰ろうとした。

「てえ、何だよ。いいだろ紹介くらい。命の恩人だぞ」

「城戸、いいかよく聞け。俺はある理由で仮面ライダーだって事を

あの女を取り巻く奴らには言っていない」

「あつ、あれ仮面ライダーって言うのか！」

真司の脳天にパンチがお見舞いされた。

「なんでそんなに暴力振るうんだよ！もうあつたま来た！」

「じゃあやるか？」

蓮と真司のやりとりを笑いながら見るマミ。

「仲がいいのね、大丈夫よ。キュウベえは今近くにいないわ。・・・

秋山さん」

## 第六話 まさかお前・・・？（後書き）

蓮くんは関わった仮面ライダーの事は全員覚えています。

「運命は変えるものだ」は生き方自体を変えさせようとした仮面ライダーライアこと手塚くんのセリフです

真司くんが登場しましたが主役は蓮くんです。

それと真司くん登場記念としてシャルロツテ戦は対ドラグレッダー戦の一部を再現し、ドラゴンナイトのレンのセリフも拝借しています。

また、この物語に出てくる真司くんは少々馬鹿すぎかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8994v/>

---

騎士の戦い

2011年10月9日14時53分発行